

白川の東岸に住む私は、日に幾たびも白川を渡る。
銀座橋であったり、大甲橋であったり、時には安政橋をゆっくりと歩む。
町なかを流れる川は都市のなかのひと筋の抒情である。
抒情とは思えない心、無言の中で、
私たちはひそかな想いを胸中を抱く。

どんなに周囲が都市化しても、川の流れば心はなごむ。
だが、川は運河ではない。
水が寄せる渚があり、岸辺にそよぐ萱草や葦がそよいでこそ川である。
川面に鴨が飛来し、岸の草をわけて鴨の浮き寝の姿が見える。
折りふしに人が降りて来て、水の流れの前に佇ずむ。
水よ、水よ、
去るものは再び帰らぬ、と嘆くこともある。
おのずからの川の蛇行に沿って、人は人生を考える。

生地は、聖地。 — 安永 落子(歌人)

時にゆるやかに、
折れば急速の流れとなって西下する川に
人は人生の在りようを学ぶ。
右岸の柳、左岸の桜は
なぐさめとなりはげまします。
河川に手を加えるのは
最少限にすべきである。
でなければ自然の教訓を
消すことになる。
科学が自然を凌駕すると思ふのは
人間が愚かな證據である。
運河の単調から人は
何を学ぶのだろう。

すでに運河は死流である。
道がある。道の傍らに樹木がある。
樹下には季節の草花がそよぐ。
あるきながら人々は
自分なりの考えにふける。
仕事のこと、家族のこと、そして恋人のこと。
何かを思いついた時、私たちはたちどまって木の下に休む。
そんなとき、思いがけぬ創造の芽が吹くことがある。
美しい言葉を想起することがある。
樹木は神が降りて来る場所である。
人々はその一瞬の浄化を受け、ミューズの神の恩寵を得たのである。
満たされてまたひとりの歩みにかえてゆく。
木があり草があつてこそ道である。
歩いてゆく途中で心の中に積まれてゆく思いはいつも正しく、
それが徳となる。歩く道なくして道徳は生まれぬ。
くるま社会が増長して、足である道が少くなれば、
道徳が消えるのは当然のことである。
川ひとつ、道ひとつにしても、

自然の景観は人生にとっていかに大切なものであるか、
ドロクロアは、「自然は一切の辞書だ、」と言った。
画家の目に自然は、ことのほか聖なる教訓と見たのである。
芸術は自然を写すことからはじまる。
作家が自然の美にうたれるのは、
そこに人生への佳き言葉が満ちているからだ。
そして、私一人の独断で言えば、生地は聖地である。
私にとつての大切な生地熊本は聖なる風貌を保つてほしいのである。



熊本の景観を 守り、育てていきましょ。

県では、美しい緑豊かな環境のなかで、
文化をはぐくむ知的興奮の場づくりをめざして、
次のような具体的な取り組みを実施しています。



村一森運動

昭和三十九年九月に開
催された熊本グリーンサ
ミット会議で採択された
「熊本グリーン宣言」の中
で緑の文化の創出の具体
的施策として、「村一森
運動」が唱えられました。
私たちの生活に潤いと
安らぎを提供し、ふるさ
との原風景となっている
森を守り、育てかつ新た
に創り出していくのが一
村一森運動です。

緑の三増計画

緑は、単にまちを
美しくするにとどま



緑の三増システム

地域社会の文化性を高めていくために、県
が施工する事業のうち、緑化及び良好な景観
の形成にとつて特に効果が期待できるものに、

ら、二十一世紀に
向けて人間存立の基盤
をつくるという認識に立
ち、緑化の推進と美しい都
市景観の創出を二本の柱と
しています。計画期間は、
昭和六十一年から十年間です。
緑を創り、緑を守り、緑を広
めるという三つの分野で方策を
示し、特に、県下の道路、公園、
学校、庁舎、公営住宅等の公共施
設において、現在、五百八十万本、県民
一人当たり平均三本の公的樹木を、十年間
で二千万本、一人平均十本にまで増やそうと
するものです。

学びの森構想

学びの森は、学校を緑化し、教育環境を整
え、児童・生徒の心を育てることを目標とし
ています。ですから、成長した大木を移植し
て緑の量を増やし、学校を森化するのではな
くて、幼木、苗木から児童・生徒自身の手で
植え育て、時間をかけて、学校を一つの大き
な森につくり上げていくところに、大きな意
義があります。森を介して四季を知り、鳥や
昆虫や花を知り、健康で心豊かな子供が育ち
人の触れ合いの場ともなり、ここから文化が
生れ育つからです。



緑のモニター

緑の保全や創造に
ついて地域住民の方
々から情報の提供や
提案などを受ける制
度。都市計画区域を
有する市町村を中心
に八十二名にモニタ
ーを依頼しています。
昭和六十二年九月
に発足以来、モニタ
ーの方々からは、地
域に根ざした具体的な情報が寄せられていま
す。県では関係機関の協力を得ながら、これ
からの貴重な情報に、キメ細かな対応を図っ
ていくことにしています。